

(三) 犬登場

山羊が小用をたす時には、小腰をかがめてほんの少し力む。その格好を見ると、女房は母親の話を思い出す。昔、大正生まれの母親が小さかったころ、ばあ様どもは田舎道の脇で着物の裾をまくって小腰をかがめ、ちょいと足を開いて、後ろにとばしていたような。戦前は女も立ちションをしていたのである。

で、「大」のほうは、山羊はまるで力まない。草を食べ食べ、尻尾をヒュイイと持ち上げたかと思うと姿勢はそのまま、干し納豆のような黒いウンチをポロポロと草の上に落とす。原料はオール植物性なので、肉食・雑食の犬猫のウンチと比べ、格段に臭くない。

ただ、食べながらいっぼうで出しているのは、どう見ても利口そうにない。

山羊の番をしている女房が首をひねっていると、近所の女房が「動物はみんなオシッコとウンチは別々にするのに、人間だけ一緒にするんだってねえ」とのたまう。

「あらそうなの」

「そうなんだってよ。でも、日本人だけなんだって。外国の人はみんな別々にするんだって」

そんなバカな！

山羊を飼い始めたもの好きな夫婦の家には、子どもが4人と女房の父親、それに猫が2匹いた。生粋の「猫派」なのである。一番上の男の子が高校卒業と同時に家を出て、7人家族がひとり減り、「だから俺の代わりに山羊を飼い始めたんだろ」とその子がしたり顔で言うが、それはちょっと違う。

山羊は犬や猫を相手にしなかった。大きさが違う。近所の犬が散歩のついでに近寄ってきても、たいていの犬と比べると山羊のほうがデカイ。「なんだこのチビ」と見下ろして悠然としていた。が、敵意をあらわに走り寄る雄の野良犬の場合は嫌がって逃げた。肉食動物と、その獲物になりかねない草食動物との関係が歴然としていたのである。

いっぼう元からいた猫は、でかい新米を徹底的に拒否した。亭主が猫を抱いて近

づくど、ひっかいてでも逃げる。が、数週間たつと、しだいに近寄ってくるようになった。少し離れ、じっと警戒態勢で、観（み）ている。英語では、好奇心は猫をも殺す、と諺（ことわざ）にあるほどである。興味はあるのだ。

山羊が草を食べに出ている時を見計らって、猫は檻に入った。好奇心丸出しにしてあちこち嗅ぎながら、歩いて回る。そこへ山羊が帰ってきた。山羊は自宅へ帰ってきただけの自然体だが、猫はパニックにおちいった。疾走する。が、すぐに檻の金網にぶつかる。

落ちる。走る。跳び上がる。ぶつかる。落ちる。

なんとか出口を見つけるまで、五度ほど激突を繰り返した。

そこへ新たに犬が登場した。

もう成犬である。3歳という噂だった。名前はジョン。近所にある元の飼い主の家の庭は広く、4区画分で200坪はあったろう。金網の塀をめぐらせて門が閉め切られた中を、雑種の柴犬は自由自在に走り回っていた。散歩には遠く川土手まで連れて行ってもらう。大嫌いな雷がゴロゴロと鳴れば、犬は飼い主のばあ様の寝床に飛びこんだ。恵まれた環境にいたのである。ところが事情があって飼い主がアパートに引っ越すハメになると、シレッと犬は置き去りにされた。

犬が野良になって10日ほど過ぎ、ちょうど暇に任せて自治会の会長をしていた女房のところへは、どうにかしろと犬の隣人から電話がかかってくる。

動物好きの亭主が見かねて「可哀そうだよ。飼おう」。

もの好きはもの好きだが、それほど生き物に興味のない女房は顔をしかめた。毎日散歩に連れて行くことになるのは誰だ。

犬好きの知人いわく、「犬も種類と大きさによって必要な運動量が違ってくるんだよ。今流行（はやり）のチワワなんて1日15分も歩けば上等、中型の柴犬で1時間くらい。でもドーベルマン・シェパードなんかの大型犬は自転車と一緒に走ってるの見るだろ、あれで1時間×2だよ」

とんでもない。

が、世話になったこのばあ様への恩返しへの念はあり、野良犬をほうっておくわけにもいかず、生活情報誌に広告を出して貰い手があるまで、という条件で、女房は

腹をくくった。

ジョンはすなおに夫婦の買ってきた首輪につながれた。散歩に行くのにもおとなしい。

問題は山羊だった。

互いにやきもちを焼くのである。

山羊は空き地の草を食べさせる目的で飼ってあるので、昼は檻から出して杭になぐ。その時に犬が猛烈に吠える。自分も連れ出せと要求するのだ。さらに、犬にとっては自分が唯一無二の可愛がられる存在である筈なのに、目の前で飼い主が今まで見たこともない妙な動物の世話をやくのが我慢できない。あるいは獲物と思っているのかもしれない。山羊は山羊で、女房が犬を散歩に連れて行く間じゅう、あたしも連れてってよメエメエと鳴き続ける。

やかましい。

犬を飼ったことのない女房は、犬のしつけ方を知らない。幸か不幸か人より声が大きく、子どもを怒鳴りつける勢いで叱るが、犬の吠（ほ）え声のほうがさらにデカイ。頭をひっぱたかれると、犬は口を開けて咬もうとする。

なんでわたしがこんなことを、と女房は腹が立つやら情けないやらで泣きたくなった。叫んでいると、犬と山羊と人間の三重唱である。もっとやかましい。

生活情報誌を見て、犬が欲しいという家族が見に来た。気に入って飼ってくれると言う。が、柴犬は頑として車に乗らない。どうにかこうにかなだめすかして乗せ、ああこれなら、と思った瞬間野良犬が通りかかり、ジョンは飛び出して吠え始めた。追いかけた亭主は指をひどく咬まれる始末である。

車に乗らないんじゃダメだよ。

亭主が血まみれのジンジンする指を押さえ、ため息をつく。

女房は諦（あきら）めない。

車が嫌いなのは、今まで車に乗ったことがないからだ。前の飼い主は車の運転をしなかった。車に乗せる訓練をしよう。

あくる朝、ふだん散歩へ出かける格好で、女房は犬を車のところへ連れて行った。

バックドアをはねあげて誘うが、犬は嫌がる。抱きあげると咬みつこうとする。犬のことはわからないなりに女房は、持久戦の覚悟で自分が車の後ろに座った。犬も地面に座る。

15分たった。

さあお散歩に行こうよ、いいお天気だねえ、と機嫌をとるが、いっこうにお犬様はその気にならない。そこへ向かいのオシャレなばあ様が出てきた。

あら、何してんの。

わけを聞くと、ばあ様は犬の目を見て、あんた、ここ乗んなさい、と言って車の床を叩き、犬はすぐにとび乗った。

なんだこれは。

すかさず車のドアを閉めながら、女房はへそをまげた。毎日餌をやり散歩に連れて行っているわたしの言うことをきかずに、どうしてあのばあ様の言うことをきくのだこの犬は！

犬になめられるのは腹が立つ。が、川土手の道は景色が開けて気持ちがいい。しつかり20分も歩き、さあ帰ろう。

が、やっぱり犬は車に乗らない。また15分。

やれやれ、やっと乗った。

山羊の相手も疲れるが犬も疲れる。女房は昼間からフテ寝をした。

生活情報誌を見て犬を飼おうとやって来たふたり目の主は、40キロ離れた町に住む年配の夫婦だった。その顔を見るなり犬はすぐに腹を見せて寝転び、よろしくと言ったもので、夫婦は喜んだ。女房はおもしろくない。現在の飼い主である女房に、ジョンがこの服従恭順ポーズをとったことはないのだ。

が、この憎たらしい、やかましい犬を貰ってくれるものなら、飼い主の沽券（こけん）も何も、ものではない。軽トラックの運転席という狭い場所にも、ばあ様に抱かれると犬は何の抵抗もせず乗った。

軽トラが遠ざかり角を曲がっていくのを見送りながら、厄介払いした安堵で、女房は体中の力が抜けていくのを感じていた。